

氏名 (生年月日)	遠藤佳代子 (1983年10月22日)
学位の種類	博士 (文学)
学位記番号	文博甲第96号
学位授与の日付	2015年3月19日
学位授与の要件	中央大学学位規則第4条第1項
学位論文題目	「先鋒文学」における語りの技法
論文審査委員	主査 飯塚 容 副査 材木谷 敦・関根 謙 (慶應義塾大学文学部教授)

内容の要旨及び審査の結果の要旨

1. 論文の主題、研究方法と位置づけ

本論文は、「先鋒文学」を代表する5人の作家（馬原、洪峰、格非、蘇童、余華）の作品を対象として、彼らの「語り」の実験的技法とその効果を具体的に分析したものである。

まず、「先鋒文学」の概念について、筆者は「1980年代の中国で、海外作品からの影響を強く受けながら、様々な“物語る方法”を実験的に用いた文学作品」と定義している。言い換えれば、それらは「何を語るか」から「いかに語るか」へと重点を移した作品群と規定できる。

分析に当たって採用しているのは主として、ジュネットを始めとする物語論（ナラトロジー）の方法である。また、日本語および中国語の言語学研究成果も、適宜参照している。これによって、語りの状況の分析と叙述の技法の物語内容に対する働きの分析がともに可能となった。

多くの先行研究を踏まえていることは言うまでもない。中国における先行研究は、大きく二つに類別できる。一つは「先鋒文学」全体の社会的、哲学的、美学的意義と影響を考察するもの、もう一つは語りの技法の分析を中心とするものである。本論文は後者の流れに位置づけられるだろう。日本における先行研究は、個別の作家の個別の作品の分析に止まっている。「先鋒文学」全体を扱う研究は、本論文が初となる。

筆者は修士論文以来、一貫して「先鋒文学」の作家の技法を研究してきた。本論文では5人の代表的作家の1990年代以降の作品についても目を配り、各作家の技法的な転換を視野に入れることで、トータルな語りの技法の分析を目指している。

2. 論文の構成

はじめに

第1章 馬原

1.1 物語内容の時間と物語言説の時間の錯綜

- 1.2 語り手と人称
- 1.3 語りの虚構性と語り手のまなざし
- 1.4 小結

第2章 洪峰

- 2.1 物語内容の時間と物語言説の時間の錯綜
- 2.2 語り手の人称と語りの焦点
- 2.3 語りの虚構性と語り手のまなざし
- 2.4 小結

第3章 格非

- 3.1 「追憶烏攸先生」
- 3.2 「迷舟」
- 3.3 「陷穽」
- 3.4 「青黄」
- 3.5 小結

第4章 蘇童

- 4.1 現実性の否定
- 4.2 事実性の否定
- 4.3 二人称の働き
- 4.4 引用とその働き
- 4.5 小結

第5章 余華

- 5.1 「十八歳出門遠行」
- 5.2 「四月三日事件」
- 5.3 「死亡叙述（死の叙述）」と「偶然事件（アクシデント）」
- 5.4 小結

第6章 「先鋒文学」作家のその後の主要作品における技法的展開

- 6.1 馬原『牛鬼蛇神』
- 6.2 洪峰『恍若情人（恋人のように）』
- 6.3 格非『欲望的旗幟（欲望の旗）』『人面桃花』
- 6.4 蘇童『妻妾成群』『河岸』
- 6.5 余華『活着（生きる）』『兄弟』『第七天（七日目）』
- 6.6 小結

終わりに

3. 各章の概要

始めに

まず、研究対象の「先鋒文学」を「1980年代の中国で様々な“物語る方法”を実験的に用いた文学作品」と定義する。次に、「先鋒文学」の語りの技法を分析するに当たって、ジェラルド・ジュネットの物語論の方法を援用することを明言し、その用語や「話法」の概念を整理している。本論文では、語りのパースペクティブを方向づける主体（見る主体）を“焦点化した人物”と呼び、言表行為を行う主体（語る主体）を“語り手”と呼ぶ。また単に視点と言う場合には、語る主体と見る（知覚する）主体の位置を含む、語りの視座全体を指す。話法については、中国語と日本語の形態の特徴が異なることに留意しつつ、登場人物のことが語り手自身のことばといかに融合しているかを分析するための指標として参照すると述べる。

第1章 馬原

馬原は、「先鋒文学」の先駆者と言うべき作家である。「拉薩河女神（ラサ川の女神）」（1984年）以降、その作品は他の多くの作家に影響を与えた。馬原自身が自覚的に物語る方法についての実験を行ったことは、随筆や小説中での自己言及からして明らかである。その語りにおける実験的手法は主として、「物語言説の時間と物語内容の時間の錯綜」、そして「語り手の人称変化」である。第1節と第2節では、この二つの手法に注目して馬原の作品を詳細に分析している。第3節では、現実性を強める語り（時間や場所に関する記述）が逆に物語の虚構性を際立たせていること、語り手が物語の外側に存在する「現実」に関してはまったく確定性を疑っていないことを指摘する。

第2章 洪峰

洪峰は一般に馬原の追随者と見なされ、「模倣」を批判されることもある。そこで、第1節と第2節では第1章と同様、「物語言説の時間と物語内容の時間の錯綜」および「語り手の人称変化」について、「虚構性」に注目しながら分析を行っている。その結果、実際は、それほど馬原と似ているとは言えないことが明らかになった。物語の虚構性を前提としているという点では馬原との共通性があるが、馬原と違って洪峰の作品は物語の“意味”を拒絶していないからである。第3節では、語り手の社会制度や人間関係に対する認識のあり方を取り上げ、その反規範的性格を明らかにしている。

第3章 格非

しばしば指摘されるように、格非の作品には「欠落」（中国語では「空缺」）がある。先行研究は、これを作者の世界認識として説明するものが多かった。筆者は、物語内容における欠落という現象を語りの場においてとらえ直す。主にプロットに関わる欠落と主にストーリーに関わる欠落に分類し、物語全体の中でその欠落が果たす働きを考えている。第1節から第4節まで、そ

れぞれ代表的な作品「追憶烏攸先生（烏攸先生を思い起こす）」、「迷舟（迷い船）」、「陥穽（落とし穴）」、「青黄」を取り上げ、欠落が果たす働きと“事実”の位置づけを分析し、「記憶における“事実”であれ、書かれたものとしての権威ある“事実”であれ、また共有された客観的認識としての“事実”であれ、すべて同様に不確定性をはらんでいる」ことを明らかにした。これによって、格非の作品における欠落が根本的な“事実”の不確定性、および言語による語りの本来的な虚構性を示すものとして機能しているという結論が導き出される。

第4章 蘇童

初期の代表作「1934年の逃亡」を取り上げ、蘇童の語りの技法を分析している。第1節と第2節では、蘇童の作品の特徴とされる「視点」を語り手の人称と焦点化に分けて、個々の語りの場においてとらえ直す。その結果、「1934年の逃亡」では、現実性および事実性の否定という二つの側面から虚構性の強調が行われていることが明らかになった。第3節および第4節では、二人称の働きと引用の働きを分析することで、話法の面から語り手の位置づけを解明している。「1934年の逃亡」の語り手は過去の物語内容に介入することはないが、語り手の物語内容における位置づけによって、語りの形態が変わる。語りの視点は、焦点化や話法などの指標によって示され、それは常に変動し、他の登場人物に同一化することもある。語り手は基本的に過去の物語の外にいて、焦点化した人物を客体化して語りながら、話法の形態によってその客体化の度合いを変え、ことばの距離を変動させる。筆者は、こうした語り手の位置づけによって、現実性や事実性が否定され、物語の虚構性が前景化されていることを指摘する。

第5章 余華

本章では特に時間の指示子や場所の指示子など、指示機能によって浮かび上がる語り手と焦点化した人物の位置関係を分析している。第1節では一人称の語り手が語る「十八歳出門遠行」、第2節では無人称の語り手が語る「四月三日事件」を取り上げ、語り手と登場人物の同一化と対象化の働きを検証している。第3節では「死亡叙述」および「偶然事件」の語りを通して、語り手と焦点化した作中人物との関係を明らかにした。余華の作品の語り手は、作中人物としてのことばを語るだけでなく、そのことばを対象化することもある。語りの人称は統合されていても視点が変わったり、逆に人称が変わっていても視点は統合されていたり、語りにおける距離の変動が一定の効果を生み出す。筆者は、「冷淡」「残酷」などと形容されることが多い余華の作品の特徴が、そうした語りによって支えられていることを指摘している。

第6章 「先鋒文学」作家のその後の主要作品における技法的展開

第1～5章で扱った馬原、洪峰、格非、蘇童、余華の90年代以降の作品において、各作家の語りの技法がどう変化したか、また何が継承されているかを考察する。馬原『牛鬼蛇神』には過去の小説からの引用やエピソードの重複が見られること、洪峰『恍若情人』は通俗化が指摘され

る一方で反規範性が一貫していること、格非『欲望的旗幟』『人面桃花』にはプロットの欠落など80年代の技法の継承があること、蘇童「妻妾成群」『河岸』も焦点化する人物の転換などに80年代作品との共通点があること、余華『活着』『兄弟』『第七天』では語り手の役割が縮小される傾向にあることが確認された。

終わりに

第6章までの分析を踏まえて、「先鋒文学」の語りの技法とその働きについて改めて概括している。80年代の「先鋒文学」が様々な水準における虚構性の強調を志向していたこと、90年代以降は作家によって大きな転換が見られるが、実験的な語りの技法は完全に廃れて姿を消したわけではなく、むしろ形を変えて生かされていることが述べられる。最後は、「先鋒文学」の語りを含む多面的な傾向を確認して、論を結んでいる。

4. 論文の評価

本論文は1980年代の中国で誕生した「先鋒文学」に対する、日本における先駆的研究として評価できる。

この分野の研究は従来、実験的小説に内在する社会批判の内容解説に主眼を置く傾向が強く、その作品自体が言語芸術の成果としていかなる価値を持っているかについて論じられることは少なかった。本論文は「先鋒文学」作品の構造を詳細に検討し、語りの主体と焦点化された登場人物の差異、自由話法と人称変化の手法、物語の時間的性質の位相などの要素に注目して、小説の「語り」の技法の類型化を行い、説得力のある結論を導いている。ジュネットの語りの理論を用いた研究方法も、適切なものと言える。

「物語内容の時間」と「物語言説の時間」の錯綜、語り手の自己言及と情報制限については、中国の先行研究に多くの成果が見られた。しかし、本論文は単なる実験的技法の分類整理だけでなく、「先鋒文学」作品内部における技法の効果の解明に力を注いでいる。代表的な5人の作家の数多くの作品を丁寧かつ正確に読み込む作業を通じて、語りの技法とその働きを明らかにした意義は大きい。

個々の作家の叙述の技法と物語内容の関係、語り手（作家）の自己認識についても、いくつか重要な指摘が見られる。漢民族作家としての馬原がチベットと向き合うときに顕著な民族や言語に対する批評性の欠如、洪峰の作品に一貫している社会制度や人間関係を疑う反規範性、蘇童の叙述に特徴的な映像的な語り、余華の物語が「冷淡」「残酷」という印象を与える原因についての語りの位相からの説明などである。これらの発見は、語りの技法にこだわった分析によって初めて可能になったもので、筆者の研究者としての豊かな資質を示している。

5. 問題点と今後の課題

最後に、いくつかの問題点と今後の課題に触れておく。

まず、作家相互の比較検討が弱いこと、章によって取り上げる作品数にバラつきがあること、テ

キスト選択に恣意性が見られることを指摘しなければならない。これは各章が当初、個別の論文として発表されたためであると思われる。また、ジュネット理論に対する技巧面に止まらない意味内容解釈にかかわる理解、文学作品の虚構性と現実性に関する概念の整理、中国語の語学的特性についての分析にも、やや不十分なところ、慎重さを欠く記述が見られた。

今後の課題としては、三点を挙げておきたい。一つ目は、分析の対象を5人以外の作家の作品に広げること。「先鋒文学」に分類される作家は他にも数多く存在し、それぞれに特徴を持っている。具体的には、孫甘露、葉兆言、北村ら。場合によっては、残雪、莫言らの作品も参照が可能ではないか。二つ目に、「先鋒文学」が出現する以前の中国文学作品との関係を探る必要があるだろう。「五四新文学」から「人民文学」までの大きな流れを踏まえること、その中には1930年代に登場した施蛰存、劉呐鷗、穆時英らの「モダニズム文学」の作品群も含まれる。三つ目に、「先鋒文学」を語る場合、しばしば指摘される海外文学からの影響についても、本論文は敢えて分析の対象としなかった。当然ながら、西洋のモダニズム文学やポストモダン文学、およびラテンアメリカ文学のマジックリアリズムによる作品群などを視野に入れなければならない。これらを比較対照の項目に加えれば、「先鋒文学」の研究はさらに深まることが期待できる。

6. 結論

以上の点を総合的に考えあわせた結果、審査委員は本論文が学術的な意義を持つことを認め、全員一致で本論文に博士（文学）の学位を授与することが妥当であるとの結論に達した。